

17-第16-J⑥-2 一般演題

10月17日(金) 9:00~10:00 第16会場 ホテルルイズ2階 松の間

食事(栄養)ケア⑥ 【座長】大森 順方(龍岡介護老人保健施設)

第1群: 101 入所

第2群: 203 一般的検討(意義・必要性・変化・効果・比較)

第3群: J3342 食事(栄養)ケア 経口摂取・嚥下障害

美味しいをいつまでも

～経口摂取、経管栄養の併用で学んだ事～

介護老人保健施設 リハビリタウンくじ

泥崎 有美、船渡 美智子、小松 加奈子、大村 明子、柴田 真樹子、鈴木 則子

経口摂取と経管栄養の併用を行うことにより、日常生活の中で「食べる楽しみ」を一緒に見つけた事例を発表します。

【はじめに】

認知症の進行により食事が摂れず胃ろう造設になる事もある。そうすると「もう、ご飯は食べさせなくてもいいよね。」「ご飯、食べれないよね。」と勝手な解釈で寝たきりや完全な経管栄養になるパターンも少なくないと思われる。今回、学びとなった事例は、パーキンソン病、認知症の進行により経口摂取のみでの体重維持が困難となり胃ろう造設した女性である。術後から約2年、リクライニング式車椅子に移乗し朝食、おやつを経口摂取を続け生活の中で食べる楽しみを見つけた事例を発表する。

【事例】

氏名 H氏 81歳 女性 要介護5

障害老人日常自立度 B2

認知症老人自立度 IV

既往歴

H14年 子宮筋腫摘出

H15年 パーキンソン病 アルツハイマー型認知症

H21年 ハンチントン病疑い 左大腿骨頸部内側骨折保存療法

H24年8月 胃ろう造設

H25年1月 左乳癌切除術

【経過】

平成21年6月、他施設より当施設に入所となる。入所時は独歩。食事形態は全粥、極刻み食で、見守りのもと自力摂取可能であったが疲れが見られた時は介助を行っていた。(身長140cm、体重35kg)

21年内は自力で摂取しやすいように小さい食器にしたり、むせ込みに対し汁物はトロミを付けて提供したが食事摂取量が減り緩やかに体重減少が進行した。(32kg台まで減少)原因としては環境の変化や認知症の進行によるものと考えられた。

平成22年、徐々に飲み込みが悪くなる。それに伴い食事形態を極刻み食からソフト食へ変更すると飲み込みが良くなり摂取量良好。体重の増減なく32～33kg台をキープ。

平成23年後半より昼食、夕食時は口を開けなくなり摂取量が5割～数口と非常にムラがあったり、食事を口に含んでも飲み込めない、またむせ込む日が増えてきた。更に体重減少が見られた為、10時に1個150kcalの栄養補助食品を提供してみても体重増加には繋がらなかった。

平成24年7月、体重29.8kgとなり家族に状態を説明する。話し合いを重ねた結果、家族は胃ろう造設を希望する。同年8月10日、胃ろう造設術の為、退所し翌11日に再入所となる。再入所した翌日(12日)から10時の水分補給にトロミ付のスポーツドリンクを提供。随伴症状等がない事から15時のおやつにゼリー、ムース等を提供した。

再入所から4日後には朝食の経口摂取を開始し、昼食、夕食は経管栄養を行う。食事形態は主食=ソフト粥、副食=ソフト食、汁物=トロミ付で提供。朝食時はリクライニング式車椅子に移乗し食事を摂取した。以降、約2年、経口摂取と経管栄養を併用する。朝食、10時のおやつ(ゼリー、トロミ付スポーツドリンク)はほぼ全量摂取された。口の開きが悪くなる午後はH氏が好む口当たりの良いムース、ヨーグルトで対応した。しかしながら食べないことも多かった。

【結果】

胃ろうを造設する事により経口摂取の継続に迷い、困惑する事もあると思うが今回の事例では、午前中は口の開き、飲み込みがよい事を活かしたいと考えその後のケア方針を明確にし経口摂取と経管栄養の併用を事前に家族に説明し理解を得た。食事が摂れない時は栄養士に相談し栄養補助食品を活用したり口当たりが良いものを提供したり、さらにより味が伝

わるように丁寧な口腔内清拭、舌ブラシでの口腔ケアや口腔マッサージの徹底を行うなど、ケアの統一を図り職員一丸となり取り組んだ結果約2年経過した現在も介助にて朝食、おやつを経口摂取が出来ている。体重は33kg～34kg台に回復している。また、認知症が進み発語は少なくパーキンソン病による口唇ジキスネジアの症状が見られるがむせ込みはない。何気ない日常の全てのケアを統一し続けていく事で寝たきりにならず、発語もあり職員の話している事も理解し、表情も豊かである。発語の状態、表情で体調、気分が分かり、離床時間を必ず確保するため拘縮の進行もない。今回の事例はたゆみないベストケアの積み重ねの結果と捉えたい。

【まとめ】

医師、看護師、栄養士、作業療法士、介護職と各職種の意見を調整しH氏に合ったケアが継続できていると考えられ、老健の特徴を活かした事例となった。今回の取り組みにより食べる事、離床する事の大切さを知りそれによりH氏の一番の楽しみを見つける事が出来た。また、口に合わない物は食べない、味を認識出来ているという主体的な選択をしている。これからも、温かい食事、甘いおやつを届け「美味しい」と言ってくれる姿を見ていきたい。